

ご挨拶

医療とは個人の苦痛・苦悩を癒すという意味では、人類がこの世に生まれ、文化を育てはじめて以来、様々な形で連綿と行われてきたものであろう。そうした永い歴史の中にあつて、近年に見られた科学技術の進歩をベースにした目覚ましい近代医学の発達は、四苦(生・老・病・死)についても、その身体的苦痛に関する限り大幅に減らすことができた と評価されている。しかし、いまだに治癒困難な疾病は少なくなく、それらがもたらす種々の悩みからの解放には数々の問題が横たわっている。

仏教も 与えられたさまざまな苦悩とかかわりながら、二千年の歴史を経て今日に至っている。もちろん、健康問題は大きな課題であり、古い時代には医療的行為が宗教活動の一環として行われていた。しかし今日、医療現場においては生・老・病・死はもっぱら自然科学の視点から捉えられており、宗教からはほとんど切り離されている感が強い。その結果として、仏教が 医療に参加する度合いも希薄となり、そのような事態に対する反省、批判が仏教界内外から起こっている。

仏教が自ら掲げる「広く人間に与えられた苦痛・苦悩からの解放」という基本的使命にかかわる今日的課題を探ると、その一つとして医療の果たすべき宗教の役割が浮かび上がる。高野山大学、高野山真言宗は、この課題を真摯に受け止め、医学関係者とも協力しながら、医学と宗教が共に手を携えて医療の領域で人々幸福に寄与するような実践のあり方を模索し、社会に対して何らかの提言を行うことを目指し21世紀高野山医療フォーラムの事業に取り組むものである。

21世紀高野山医療フォーラム理事長 柳田邦男(作家)

運営委員長 静慈円(高野山大学名誉教授)